

10年後の自分と、京都のまちの、
ミライとモンドイを考える。
京都市基本計画審議会

U35のメンバーが市民にわかりやすくレポートします！

傍聴記

vol.20

共済部会 第4回すこやか部会

(「保健」「教育」「福祉」分野)

主な議事:分野別方針<障害者福祉・地域福祉・高齢者福祉>の検討

開催日:平成22年3月19日(金)

会場:京都市総合教育センター



レポーター 松村 幸裕子さん

教育と福祉が手を取り合うことで、当事者を取り巻く環境が変わっていくのではないかと考える26歳。京都に生まれ育った教育系の大学院生

会議のポイント

POINT 1.

意識のノーマライズ ちがいが共にあること



委員のみなさんが、すべての人びとにある「ちがい」をお互いに認め合いながら生活していく「まち」ではないのが今の京都であることに、同意されていたことが印象的でした。

この会議を傍聴して、 松村さんが思ったこと。

「福祉」という言葉によって、人びとの中に上下関係を作ってしまうことに懸念を感じています。その中で、年齢が低ければ低いほど、自分とは「ちがう」人びとを受け入れができるのではないかと思っています。普段の生活圏が、自分とは「ちがう」人がそばにいるという環境であること。それが、多様な人びと、特に社会が障壁となっている人びとが、「その人」のままで存在できることにつながるのではないかと考えます。単に車椅子に乗る必要があるだけ、単に年を重ねてできたことができなくなっただけ、単に言葉以外の方法で自己表現をしているだけ…ただそれだけで、隣り合う人びとが持ちつ持たれつで生活していくこと、それが福祉なのではないでしょうか。

POINT 2.

人と福祉と地域の形 コミュニティの必要性



福祉の中にある「してあげる」「してもらう」という関係性をどう変えていくか、地域の中で当事者が当事者のままで生活していくために、居場所となるコミュニティ形成が必要であることが話し合われました。

私ならこうする！ 未来の京都に向けた松村さんの提案

地域の中の空き家、商店街の空き店舗を利用した屋根のある公園づくり

誰でも来ていける場所、誰かの目のある場所、そういった場を地域の中に作ることで、そこからコミュニティづくりも活性化するのではないかでしょうか。「屋根のある公園」としたのは、「公園」が屋外だけである必要はなく、老若男女誰でもがくつろいだり、おしゃべりをしたり、遊んだりできる環境となりうるからです。希薄化していると言われる地域のつながりを復活させること、自宅から外に出ることが少ない高齢者・障碍児者が気軽に来ることができる場所にすること、そしてすべての人びとが参画できる場にすることで、みんなの福祉になっていくと思います。

U35については、こちらをご覧下さい。⇒ <http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000071812.html>

今年は10年に一度の、京都市の10年後を考える年です。
市政をよく知り、よく考え、利用し、参加し、仲良くなろう

発行:京都市 編集:未来の担い手・若者会議U35

